

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	持田 洋平
<p>主 論 文 題 名： シンガポール華人社会におけるナショナリズムの形成過程 1896-1909 年</p>			
<p>本研究は、1896 年から 1909 年までのシンガポール華人社会史におけるナショナリズムの形成過程について、これを「移民社会のナショナリズム」という新たな観点から捉え直し、その歴史的な展開と特殊性・重要性を明らかにした研究である。</p> <p>19 世紀末から 20 世紀初頭のシンガポール華人社会において、ナショナリズムが形成されたことは、これまでも多くの先行研究により注目されてきた。しかし、これらの研究はナショナリズムという概念自体については深く考慮せず、いわゆる標準的な国民国家のナショナリズムという定型に当てはめる形で、シンガポール華人社会のナショナリズムの形成過程を理解しようとしてきた。</p> <p>しかし実際には、この時期のシンガポール華人社会に居住していた華人たちは、祖国である中国（清朝）という国家の制度・領域の外部にあり、中国国籍も付与されておらず、中国への政治参加や政治的権利の付与も極めて限定的であり、さらに彼らが居住していた現地の華人社会の内部も、複数の帮派と方言によってばらばらに分断されていた。国民国家という形態を前提として、ネイション・ナショナリズムといった概念を、国民国家への帰属や統合、およびその政治制度への参加などに関連する問題として理解する限り、この時期のシンガポール華人社会の動きを、いわゆるナショナリズムとして捉えることはできないだろう。</p> <p>しかし、この時期のシンガポール華人社会では、植民地宗主国であるイギリスと祖国・中国双方からの影響を受けながら、一つのネイション／人種として均質かつ一体化された存在としての華人、あるいは集団としてのシンガポール華人社会という発想が発見されると共に、この発想を利用して華人社会内部を連帯させ、様々な社会・政治・文化活動を行おうとする試みが活発に行われた。本研究はこのような当時の華人社会の状況を、いわゆる国民国家のナショナリズムとは異なる「移民社会のナショナリズム」の形成に関する重要な事例であると考え、シンガポール華人社会の内部構造という観点から、その歴史的な展開と特殊性・重要性を明らかにした。</p> <p>本研究は、序論（第 1 章）や結論（第 9 章）、本論の前提となる歴史的な概要を述べる導入部（第 2 章）、史料・参考文献一覧（第 12 章）などに加え、合計 6 章（第 3 章から第 8 章）の本論から構成される。以下、章ごとの内容を簡単に説明していく。</p>			

「1 序論」では、まず本研究の問題関心について、現代のシンガポールにおける歴史の語られ方という問題と、ナショナリズムの歴史的な多様性という観点から議論した。また本研究の先行研究や史料についても、いくつかに分類しながら整理した。さらに、本研究にとって重要なキーワードとなる「ナショナリズム」などの用語や方法論についても、シンガポール華人社会史研究という文脈に沿った形で用いることを前提として、検討を行った。

「2 シンガポールにおける華人社会の形成」では、本論の前提となる概要を述べる導入部に当たる箇所であり、19世紀末までの時期におけるシンガポール華人社会の発展とその外部・内部構造について、主に先行研究を整理する形で議論した。この中で特に、イギリス帝国によるシンガポールを含む海峡植民地の植民地統治のもとで、ネイション／人種という概念が重視され、このような枠組に基づく「華人」(Chinese)の居住地として、シンガポール華人社会が人為的に形成されたこと、また華人社会の内部が複数の方言と帮派によってばらばらに分断された状況にあったことを強調した。

「3 林文慶らの出現と辮髪切除活動に起因する騒動(1896-1899年)」では、まず19世紀後半の海峡植民地における秘密結社への法的規制の進行により、19世紀末に新たに華人社会のリーダーシップを担う集団として、林文慶ら「現地の改革主義者たち」が台頭したことを述べた。さらに、林文慶らが計画した辮髪切除活動が、1898年から1899年にかけて華人社会に大きな騒動を巻き起こしたことを、時系列的に整理しながら議論した。また林文慶らの社会活動や辮髪切除活動に起因する騒動を通して、シンガポール華人社会という場に所属する華人の間にナショナルな共通性が存在することが広く意識されるようになったことを強調した。

「4 康有為のシンガポール来訪とその社会的影響(1900年)」では、1900年の康有為のシンガポール来訪について扱った。先行研究では、華人社会のナショナリズムは、中国国内政治に関わる政治的党派からの働きかけにより高揚していくと考えており、この出来事はこのような展開の起点として捉えられている。これに対し、本研究はまず、この出来事に関する植民地政庁の対応や現地の華人社会への反応などを整理し、この出来事がシンガポール華人社会内の政治的なナショナリズムの台頭を促進するような直接的な影響を与えたわけではなかったことを論証した。さらに、中国本土の政治的党派の活動や関係性、現地への働きかけばかりに注目する先行研究の問題点を意識しながら、シンガポール華人社会の能動性・主体性に注目する形で、康有為のシンガポール来訪の歴史的な重要性を論じ直した。

「5 孔廟学堂設立運動の展開(1898-1902年)」では、1898年から1902年にかけて、林文慶ら「現地の改革主義者たち」により主導される形で展開された、孔子廟と中国語学校を併設した教育施設である孔廟学堂の設立を目的とした社会運動について、この運動の歴史的な展開を整理すると共に、その失敗に至る社会的な背景を議論した。加えて、この運動の宣伝言説に着目し、この運動が現地で帮派の壁を越えてシンガポール華人社会全体に働きかけを行うことにはじめ

て成功したナショナリズム運動であったことを明らかにした。

「6 19世紀から20世紀初頭のシンガポール華人社会における「反満州人主義」の系譜」では、19世紀から20世紀初頭のシンガポール華人社会における「反満州人主義」の連続性と系譜について検討を行った。この中で、特にイギリスのネイション／人種観念や社会ダーウィニズムなどが組み合わさった西洋近代的な「反満州人主義」が、19世紀末から20世紀初頭の時期において、林文慶ら「現地の改革主義者たち」から陳楚楠・張永福ら「革命派」のメンバーたちに受け継がれたことを明らかにした。加えて、この議論を通して、先行研究が共有している「反満州人主義」の是非に基づく「立憲派」と「革命派」との政治的な対立関係の形成という議論が、虚構に満ちたものであったことを強調した。

「7 シンガポール中華総商会の社会的機能の形成過程（1905-1908年）」では、中華総商会の1905年から1906年における設立過程、およびその設立初期、1906年から1908年にかけての社会的な活動について詳しく検討を行った。この検討を通し、中華総商会がその設立初期より、華人社会内の幫派のとりまとめや華人社会全体を代表するリーダーシップの発揮などに関わる社会的な機能をどのように形成したのかという点を明らかにした。また中華総商会がこのような機能を担うことを可能とした社会的背景についても、この団体の活動に関する宣伝言説に注目する形で考察した。

「8 各幫派による初等学堂の設立・運営とその社会的背景（1906-1909年）」では、1900年代後半のシンガポール華人社会で、「国語」を標榜する中国語教育が、複数の幫派によって展開された原因を考察した。具体的には、特に広東幫の養正学堂と福建幫の道南学堂に注目する形で、これらの「国語」教育を標榜した初等学堂の設立過程や初期活動を整理した。さらに、これらの初等学堂の相互関係や連帯・分断といった構造を生み出した社会的背景についても、幫派による華人社会内部の分断と、「国語」教育や「祖国」への貢献の重要性に関する社会的な認識の普及という観点から説明を行った。

「9 結論」では、本論の内容を整理し、「移民社会のナショナリズム」としてのシンガポール華人社会のナショナリズム形成の歴史的な展開をまとめると共に、これまで先行研究が共有してきた、中国国内の政治的党派の対立的な関係性を中心とした観点に基づく説明が、多くの誤りに満ちていたことを明示した。さらに、本研究の議論が他の研究領域に対していかなる示唆を与えうるかという点について、現代に至るまでの長期のシンガポール史とナショナリズム研究という二つの研究領域を対象として議論した。

「10 各章論文初出に関する説明・謝辞」・「11 人物略歴」・「12 史料・参考文献一覧」では、それぞれ本論で記載しなかった補足的な情報について説明を加えた。

